

日本現象学会 2019 年度研究大会（第 41 回）
シンポジウム「文学を通じての哲学 現象学の可能性を探る」

提題者：入谷秀一（龍谷大学） 川崎唯史（熊本大学） 高田敦史（無所属）
司会：加國尚志（立命館大学）

哲学と文学とはどのような関係にあるのだろうか。哲学は明晰な論理に基づく議論を展開する点において文学と区別されうる。しかし、哲学者が文学者であることや文学を手掛かりに哲学的考察をすることがあるように、両者には密接な関係も見いだされる。とりわけ現象学は、文学と同じように、人間の経験の微細なニュアンスやその生をとりまく複雑な状況を記述することを重視する哲学でもある。本シンポジウムでは、文学などのフィクションを手掛かりに哲学的思考を展開する意義を探りながら、文学と哲学との接点を探ろうとする。入谷は、自著『バイオグラフィーの哲学』の成果を踏まえながら、コンステレーション(星辰布置)をキー・ワードに、フィクションやイメージーションが持つ哲学的意義について検討する。

川崎は、文学作品における傷つきやすさの具体的な記述が従来の哲学・倫理学の諸前提を問い直すことに注目しつつ、現象学的手法の現代的意義を明らかにする。高田は、英米圏の分析美学の最新の動向としての「文学を通じた哲学」をめぐる問題を整理したうえで、文学などのフィクションを手掛かりに哲学をすることの可能性を探る。これらの提題やディスカッションを通じて、現代哲学における現象学の位置づけが明らかになり、その可能性と課題とが共有されることになるだろう。